

異れたのは、なほ、原始時代以来人類の高度な諸文明は、(汎汎)として、に世界の諸民族の間に交流した。それは各民族の異なる自然社会的歴史的環境の中で独自の文化伝統を成立させ、多彩な特色を呈してに至った。

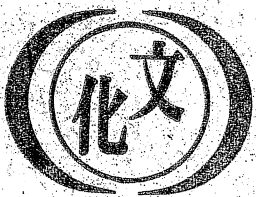
私などのような事実を記したものは諸族のおおの文化伝統は世界の諸文明の交流の中であつたことを語りたいかつてゐる。私は柳田の一面的に關しても主張しているが、文明の交流の異なる伝統が生まれ、その差を行つていかにして特色化するものか、三層おびての残存が、その中から真実なものはならない。(日中密所理事長・社会學

異常の中にこそ民俗の本質

民衆運動

[illegible]

法の問題にすぐ迫つたものであつた。こうした批判にたいし

[illegible]

て、なななくを私として、朝田の若者組についての研究や、私と世間」における姿について、わた「公認」の著書「の義田の伝統について」の研究から、自分の一様認識のある不可欠の部分を示唆されたら願っている。また、朝田としての諸君（むね）のなかだが、日本の民衆には「上へ下へ」の関係、それは「多数決主義」の横列対等の交通」の伝統があり、それが百姓一餐のうしろ姿自らの結果様式を生みだしたことを指摘したい。

住谷 一彦

[illegible]

日本民族・文化が悠久（ゆうき）
 かつこの世界のちのちのよう
 な文化的意義を有するが、あなたが
 もドイツ人が「國歌して山河あか
 といった歴史の有為転変のなかから
 といった歴史の有為転変のなかから
 において、なほドイツ文化への誇
 と自衛にも必要な生きな
 ごとくに日本人を國の文化とな
 その伝統に普遍史の意義を與へた
 し傳るが否か、が今日問われてい
 るように思われる。私はただひ
 とりの心のどこかにそそいだ「氣持
 ちが清んでいることが、開拓の柳
 田アム」といわれる瑣事（さじ）を無

その場合柳田の思想的意義は、まず第一に日本マルクス主義上の先覚者であり、比較思想的にみるとき恐らくはイタリヤ・マルクス主義でグラムシが占める位

——生誕百年にちなんで

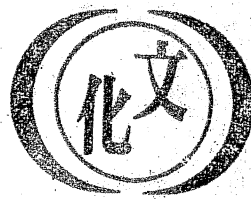
自らの思想的空隙の
穴埋めや贅歌にするな

證に対応するかに見える河上肇との関係によって定められることに

なる。明治三十八年に刊行された河上の名著「日本農政学」序文には柳田の「農政学」から受けた学

恩への言及がみられ、その内容を検討しても、経済政策の骨子である藤工商併進鼎立（ついでに）論は、柳田のそれと根本的には全く同一といふよいほどに同じである。

それはかりではない。京都大學図書館にある河上の蔵書には柳田の「遠野物語」「後狩詞記」「左神問答」が含まれており、「後狩詞記」は表紙に柳田の署名で「河上大吉蔵」と書かれている。



議論稿をみれば、彼の関心は依然として初期と同じ日本人、日本民族、文化への関心であり、柳田と同じく祖国への熱心（じれつ）なバトスをそれを受けている。彼の文化人類学を柳田日本人論学と對比して、民族（エトノス）でなく人類（アントロプス）が軸心となっている点で日本土著の思想から遊離した性格を示すものとの評価を下すがあれば、それは皮相な考察と言わねばなるまい。むしろ柳田が自ら民族を託した生涯の問いに対して同じく等問的に解決しようと試みていた点にこそ、評価の力点がおかれたらならぬであらう。

だが、柳田の論証は、あまのつみに、各村々の氏神について、同じ血筋に繋がる善者が興まつて、共に同じ祖先の好意で信仰して、文屋に感謝しようとするもの、が、社において神を祭り始める時、一つの動機である。たゞ、あまのつみに於ける要するものは、日本人に固有な徳性、それは相違なくあるであらう。これを起して、風俗、し、あの壯大な「海上の道」——本民族起源論に於ける行爲論、かならずして持つべきもの。是非如何

可なりは柳田学の識の要（かねめ）をなしてゐる。柳田は、
 今田の一点を全面的に、客觀的に、
 今田を試みてゐる。原田の所説に、
 柳田は柳田の書とてき族神、
 神でなへむ、む、む、む、む、
 龍たる神、龍一柱あり、地靈性、
 を特徴とする高神である。したが
 つて、柳田が日本人の國土信仰と
 なした先祖信仰は、實証の神傳
 仰比なれば二次的な現象とみなす

の場合には祭祀(いづか)におひき
女性の役割が前面に出る琉球諸神の
民俗文化は日本本土のそれよりも
も古い相模(さか)の古事記(いにしへのことば)に
さかみかへり、その由をむねに
伊波の前進論の立場に近くなる。
柳田の思想は、以上に見えてき
ように多くの優れた知識人に深
な影響を与えてきたが、それは
間の創造力・生産力に關連する
ペルに抱いてであり、教養として
愛護するの否かのそれにあつた
はなはだしい。ついでとあげた四人は
いずれもそうした柳田の思想と密

問ひ、解決すべく努めたのであつて、河上柳田氏における露政學伊波は「柳葉」、石田は「松陰」等として、原田は「神沖」祖露傳記を著とする新聞學の周囲へそれらと鋭角錯進した。したがつて、彼の場合、時の思想が露政學に「藤」へつゞきを柳田氏にたゞ藤へつゞきを柳田氏に埋めたるにたゞのみならずなかつたのである。今日の柳田氏の関が「近代の紹興」思想へ結びつきつゝ柳田實業家としての秋(生)を安んずるべきもの日本復帰としての舊書本の道に懷びつつあるのは一面から見てであらう。

一五三

